

お念仏のしずく

「念仏に生きるもの」

念仏に生きるものは、それとともに、さらにはそれ以上に、私たちひとりひとりが、自分の心の底にやどしている 獣の心、業縁がもよおさば何をし

でかすかわからない鬼の心を、徹底してかえりみてゆかねばならないと思います。そしてこの心を、くりかえし、くりかえし、仏の光明によって照らしだし、問いつづけてゆくことが大切であります。



生きる道が、よくきりひらかれて来ると思います。

まことに、この親鸞聖人の、はあらず、また害せじと思うとも、百人、千人を殺すこともあるべし。……さるべき業縁

のもよおさば、いかなるふるま

いもすべし」

という教訓は、私自身のいつわらざる姿を、よくも、よくも、いいあてられた言葉であります。

私は終生、この言葉を私自身にくりかえして言いきかせながら、生きてゆかねばならぬと念じております。

『この道をゆく』



大切な事をこの男の子が教えてくれた気がしました。うそはついてはならないといいますが、うそをつかない人はいないようです。専門家の中には、人は一〇分に二回程度うそをつくという学者もいますし、人は毎日二百回うそをつくという説まであります。うその内容にもよりますが、実は私たちは自分で思っているより多くのうそをついていることに気づいていないようです。数についてはどうかわかりませんが、多かれ少なかれ、私たちはうそをつくし、うそになることもあります。そんな中でこの男の子は自らのうそに気づき、本当の事を言ってくれました。子どもの心はとても純粹で、素直だと思います。その子どもの心を、私たち大人が見習わなければならぬように思います。

は誤解されやすい教えだけれども、私たちが普通に思っている善人悪人ではなく、仏さまから見た悪人こそが、救いの目当てだと言うことです。仏さまから見たら私たちみんな悪人なんですね。いろんな悪を犯しているところが私たちは自分で自分が悪人とは思っていない。自分は善人だと思っている。だから、この教えが人ごとであったり、悪をしてもいいのだと誤解したりしてしまうんです。」とお話し下さいました。仏さまから見れば、悪ばかりの私たちです。うそをつくのは悪いと知りながら、うそをついてしまいます。うそをつくると「閻魔様に舌を抜かれるよ」と昔から言われてきました。また「うそを言えば地獄へおちる」とも。経典には書いてあります。仏教には五悪、十悪という悪の誠めがあります。五悪から十悪へは口の悪、うその悪業が増えていきます。それほど口にまつわる悪を戒めたのです。



親鸞聖人は歎異抄に「煩惱具足の凡夫、火宅無常の世界は、よろづのこと、みなもつてそらごとたはごと、まことあることなきに、ただ念仏のみぞまことにておはします。」と示し下さっています。私たちはみんな本當のことを言っているつもりでいますが、仏さまから見れば、どれもこれも「そらごと」「たわごと」とうそばかりなんです。私たちの言葉がどれほど軽く「そらごと」「たわごと」ばかりかはお聴聞でお聞かせ頂きましょう。今まで簡単に「仏の子はいつも本當のことをいいます」と言ってきましたが、考えてみると本當に難しいことです。今まで当たり前で唱和していましたが、これからは唱和する度に、冷や汗も流すのです。

そんな私ですが、幸いにも親鸞聖人が、まことの言葉も教えて下さっています。「ただ念仏のみぞまこと」と、親鸞さまは本當のことはお念仏のみだと教えて下さいます。とはいっても、生活でさまざまな生活の中にはうそや「そらごと」「たわごと」がいっぱいあります。そのまことの言葉に触れられませんが、まことの言葉が届けられていることを忘れず、ことある毎にまことの言葉に触れていきたいと思えます。そのまことの言葉に触れられませんが、「そらごと」「たわごと」も見えてくるというものです。

今回五歳の子どもが教えてくれました「ぼくたまにうそをつく」といえる人こそ本當の事をいい、正直者です。「私は悪人である」といえる人こそ、最も浄土に近い人なのだと思います。前住職が「うそにあう」という話をよくしていました。本當のうそにあうことです。この自覚、ほつとけば見えてくるものではありません。何が悪か、お念仏申しお聴聞することで、本當の私が見えてくるようになるのです。うそがうそと見えた人が、本當の事が見えた人であり、信心の人なのだと思います。

「シルバー川柳」より

- 「お迎えは どこから来るのと 孫が聞く」
- 「お迎えは 何時でも良いが 今日嫌」
- 「無宗教 今は全てが 神頼み」
- 「おじいちゃん 冥土の土産は どこで買う」
- 「なつてみりや あの年寄は 偉かった」

安楽寺法要案内

一月	御正忌	日時	1月13(土)
		朝席10:00～ 昼席13:00～	
	講師	住職自勤	
	講題	未定	

※年間予定表は後日お知らせいたします。

暮らしの中の仏教語

「開発」

国土開発、電力開発、産業開発、技術開発などと使われているように、開発とは、山地などを切り開いて、天然資源を取り出し、産業をおこすことや、知識をひらき導くことを意味している日常語です。

教育界では、生徒の自発的な学習をうながすような

教育方法を指しています。その開発は、仏教語としては「かいほつ」と読み、他人を悟らせること、自らの仏性をうち開くことを言います。人間には誰でも、仏になるタネがあり、それを開き明らかにすることを言うのです。

仏教語の「かいほつ」が「かいほつ」となって、一般化したものです。

しかし今の開発は、どの言葉も仏教の悟りとはほど遠く、環境破壊や、地球温暖化の元凶ともなるような開発が多いように思います。折角仏教語を頂いたのに、勿体ないことです。

